

# DVD版とVHSビデオ版の案内

## 闘病実話映画

文部省選定/日本PTA 全国協議会特薦/優秀映画鑑賞会推薦

原作 植木亜紀子・植木 誠/監督 山田典吾

〈カラー作品〉

# ママ、ごめんね

## あっこちゃんの日記

江波杏子/なべおさみ/高岩 愛/石野真子/二木てるみ/長岡輝子



胸に迫る生の喜び

死後二十年余を経た今も感動が語り続けている  
8年間、白血病と闘った少女の記録

「ママ、ごめんね」と言いながら  
明るい涙で綴ったあっこちゃん  
11才の白血病闘病日記!

視聴時間 74分

ライブラリー本体価格

各50,000円(税別)

岩波映像株式

(団体用)

教研学習社

(個人販売)

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-1-13-205

TEL 03-5689-2601 FAX 03-5689-2685

〒116-0012 東京都荒川区東尾久 8-36-12

TEL 03-3892-6241 (FAXも同じ)

<http://www.mama-gomenne.com>

# 映画

## 「ママ・ごめんね」の内容

あつ子（植木亜紀子）は三歳の夏、白血病とわかり脊髄注射など辛い治療に耐えながら五年生になった。四歳年下の同じ病気のチイちゃんは学校にも行けないので、かわいそうに思った、あつ子は、できるだけ見舞って遊び相手になってやった。五年生の夏休みの終り頃、あつ子は八回目の入院となった。入れ換わるようにチイちゃんは、他の病院へ転院していった。あつ子は今度は手紙で励まし続けたが七通目を出した時、チイちゃんは死んだ。それを知らされない、あつ子は、なおも手紙を書き続けたが母親は出すふりをして預っていた。

十一歳の誕生日にクラス全員が、千羽鶴で書いた、「あつ子、はやく、よくなって、がっこうへきて」の横断幕を病院前の道路に広げて見舞ってくれた。また、学校の給食を「食べたい」と言う、あつ子に担任が、わざわざ運んでくれたこともあった。

あつ子が幼いながら迫りくる死への時間との勝負を強いられていた時、学校の屋上から、「あつ子ーガンバッター」と級友の大合唱が、病室まで聞こえてきた。あつ子は、「私、いつまでも治らないと皆んなに嫌われてしまうねー」と言いながら嬉し涙を流すのでした。

2000年(平成12年)

### 白血球闘病記「ママ、ごめんね」 本に映画に不思議な生命力

だれもが知っている映画ではない。山田典吾監督の「ママ、ごめんねーあつこちゃんの日記」という作品。小学生の娘を白血病で失った父親が、残された日記を出版し続ける「あつ子の日記」シリーズの映画化は、十五年前のこと。出版と上映運動に後半生を賭けた植木誠さん(71)（東京都荒川区）の執念が、今も各地で人々の心を動かしている事実を最近、改めて認識した。



植木さんが買の出版社「教研学習社」をい取り、全国設立。子供向けの「ママ、ごめんね」をはじめ大人向きかけて自主けや漫画版、読者の声を集めた本など、計十五冊を出版してきた。宣伝に割けるフィルムだ。費用はないが徐々に評判が広がりに、「ママー」だけでも二十数万部のロングセラーとなっている。

「自分自身の生き方を交えようとと思った、といった感想が今でも寄せられる。読者の反響のお陰でやっつが殺到、同じころれました」と、植木さんに追加上映する事になった。二回目もほぼ満席という。

植木さんの二女・亜紀子さん(当時十一歳)は一九八三年三月、「ママ、ごめんね」と言うて力尽きた。中学教師の父は、娘の日記に、「最高の教科書」を見いだす。全身の激痛に耐えつつ他人を思いやる気持ち、虫や花の命を慈しむ心。

「闘病記は一時的にしか売れない」と大手出版社に日記の出版を断られた植木さんは、退職して夫婦だけ

### 手帳

大量消費社会。出版界でも映画界でも作品のヒットは出足が肝心で、その時は膨大な宣伝費が投じられるが、短期間で売れなければ優れた作品でも冷遇され、やがて忘れ去られる。

「ママ、ごめんね」の不思議な生命力は、短いが見事だった娘の「生」を伝えるという両親の使命感に支えられている。同時に、それは「採算」「儲け」とは次元を異にする本来の「文化」を考えさせる。衣料や食糧と違って、文化は消費されるものではない。

## 販売 ● 岩波映像 株式会社

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-1-13-205  
TEL: 03-5689-2601 FAX: 03-5689-2685

URL: <http://www.iw-eizo.co.jp>  
Email: [iwanami@iw-eizo.co.jp](mailto:iwanami@iw-eizo.co.jp)